第 59 回 青山学院大学英文学会大会

プログラム

日時: 2026 年 12 月 12 日（土）9 ： 45 ～ 20 ： 00

会場: 青山学院大学　青山キャンパス

青山学院大学英文学会

青山キャンパス構内図



大会会場

大会受付	17 号館 5 階	17511 教室前
大会本部	17 号館 5 階	17510 教室
講演者控室	17 号館 5 階	17503 教室
研究発表者控室	17 号館 5 階	17502 教室

懇親会会場

アイビーホール 茶珈堂（ちゃかふぇどう／Cha Café Do）

最寄りの東門は 16:00 に閉門します。

記念館門または、正門から青山通り沿いを表参道方面へ向かい右折、レストランフェリエの先、約 100m先右手です。

タイムテーブル

新任者講演（13:10）よりオンライン配信開始

時間	プログラム		会場
9:45～ 9:55	開会式		17511 教室
10:00～10:40	研究発表	英文学１	17506 教室
		英文学２	17507 教室
		米文学	17508 教室
		コミュニケーション	17509 教室
10:45～11:25	研究発表	英文学１	17506 教室
		英文学２	17507 教室
		米文学	17508 教室
		英語教育学	17509 教室
11:30～12:10	研究発表	英文学１	17506 教室
		英文学２	17507 教室
		米文学	17508 教室
11:00～13:10		ゼミ紹介	17512 教室
12:10～13:10		休憩	
13:10～14:10	新任者講演	（長沼　美香子　教授）	17511 教室
14:20～15:50	退任者講演	（小野寺　典子　教授）	17511 教室
16:00～17:30	退任者講演	（寺澤　盾　教授）	17511 教室
17:30～17:50		懇親会会場に移動	
18:00～20:00	懇親会		アイビーホール１階 Cha Café Do（茶珈堂）

プログラム

開会式　9: 45～ 9:55　**17 号館 5 階 17511 教室**

開会の辞：　麻生　えりか　教授　（英文学会会長）

研究発表　10:00～12:10

第１室： 17 号館５階 17506 教室

【発表１】英文学１

10:00～10:40

アドバイザー： 田中　裕介　教授
麻生　えりか　教授

司会： 岡田　芳紀（博士前期課程１年）

発表： 山田　結心（博士前期課程１年）

題目： 人間社会に暮らす１頭の子グマと倫理観
―Michael Bond, *A Bear Called Paddington*（1958）をめぐって

【発表 2】英文学１

10:45～11:25

アドバイザー： 田中　裕介　教授
麻生　えりか　教授

司会： 岡田　芳紀（博士前期課程１年）

発表： 塚田　真結（博士前期課程１年）

題目： Agatha Christie, *4.50 from Paddington*（1957）における女性表象

【発表 3】英文学１

11:30～12:10

アドバイザー： 田中　裕介　教授
久野　陽一　教授

司会： 岡田　芳紀（博士前期課程１年）

発表： 龍野　隆治郎（博士後期課程１年）

題目： Satan の Vicious *Prohairesis* は如何に形成されるか？
John Milton の *Paradise Lost* における
Aristotle の *Nicomachean Ethics*

***

第２室： 17 号館５階 17507 教室

【発表 1】英文学２

10:00～10:40

アドバイザー： 橋本　智弘　准教授
松井　優子　教授

司会： 佐藤　優羽（博士前期課程２年）

発表： 保　友花（学部４年）

題目： 『ダロウェイ夫人』に表れる東洋的特徴

【発表 2】英文学 2

10:45～11:25

アドバイザー： 笹川　渉　教授

伊達　直之　教授

司会： 佐藤　優羽（博士前期課程２年）

発表： 岩政　来愛（博士前期課程１年）

題目： Thomas Hardy の“The Darkling Thrush”における世紀末の超克

【発表 3】英文学 2

11:30～12:10

アドバイザー： 橋本　智弘　准教授

松井　優子　教授

司会： 佐藤　優羽（博士前期課程２年）

発表： 橋本　真里菜（博士前期課程２年）

題目： Elizabeth Gaskell の *Mary Barton* におけるケア労働と生存

***

第 3 室： 17 号館 5 階 17508 教室

【発表 1】米文学

10:00～10:40

アドバイザー： Mary Knighton　教授

来馬　哲平　准教授

司会： 松坂　朱莉（博士後期課程３年）

発表： 深井　捺稀（博士前期課程１年）

題目： Eugene O'Neill の *Beyond the Horizon* におけるクィアな関係性

【発表 2】米文学

10:45～11:25

アドバイザー： 橋本　智弘　准教授

来馬　哲平　准教授

司会： 松坂　朱莉（博士後期課程３年）

発表： 太漏　明音（学部４年）

題目： Richard Powers の *The Overstory* における物質としての時間

―身体性とメタモルフォーゼによる人間中心主義の解体

【発表 3】米文学

11:30〜12:10

アドバイザー： 外岡　尚美　教授

来馬　哲平　准教授

司会： 松坂　朱莉（博士後期課程３年）

発表： 赤羽　明　カルス（博士前期課程１年）

題目： A Composite character in *The Grapes of Wrath*

***

第 4 室： 17 号館 5 階 17509 教室

【発表 1】コミュニケーション

10:00〜10:40

アドバイザー: 長沼　君主　教授

飯田　敦史　教授

司会： 小泉　明日香（博士前期課程１年）

発表： 青山　千夏（学部４年）

題目： Why Japanese English Education Needs Reform:

A TESOL and Intercultural Communication Perspective

【発表 2】英語教育学

10:45〜11:25

アドバイザー： 長沼　君主　教授

飯田　敦史　教授

司会： 小泉　明日香（博士前期課程１年）

発表： 平林　　紗良（学部４年）

題目： Rethinking Education in the Age of AI:

Human Skills, Experiential Learning, and Career Development

***

ゼミ紹介　11:00〜13:10　　**17 号館 5 階 17512 教室**

ポスターセッションによる演習の紹介

随時入退室可能となっております。

***

12: 10〜13:10　休憩

***

新任者講演 **17 号館 5 階 17511 教室**

13:10～14:10

題目： 「ためらい」と「とまどい」の TS

講師： 長沼　美香子　教授

司会： 稲生　衣代　教授

退任者講演 **17 号館 5 階 17511 教室**

14:20～15:50

題目： 青山学院での社会言語学/語用論研究 32 年：
談話標識の拡大する文法化・歴史語用論・周辺部・意味変遷

講師： 小野寺　典子　教授

司会： 野邊　修一　教授

16:00～17:30

題目： 『欽定訳聖書』－ その成立前史と受容 －

講師： 寺澤　盾　教授

司会： 葛西　宏信　教授

懇親会

18:00～20:00　アイビーホール 1 階　Cha Café Do（茶珈堂）

新任者講演

17 号館 5 階 17511 教室　　13:10～14:10

「ためらい」と「とまどい」の TS

講師：　長沼　美香子（本学文学部教授）
司会：　稲生　衣代（本学文学部教授）

タイトルのなかにある TS は、Translation Studies と Translator Studies、つまり「翻訳研究」と「翻訳者研究」を意味する。

これら２つの TS という研究は、AI 時代にどのような知見を提示しうるのか。本発表では、明治初期に大規模な翻訳プロジェクトとして企図された文部省『百科全書』–起点テクスト（底本）は、英国ヴィクトリア朝に出版された 92 項目から成る啓蒙書 *Chambers's Information for the People*, edited by W. & R. Chambers–を事例として、その翻訳テクストに垣間見える翻訳行為の「ためらい」と「とまどい」の分析を試みる。なお当該の翻訳書は、1873 年頃から分冊版で文部省から刊行され始めたが、民間書肆による合本版など各種の異本が存在する。

文部省『百科全書』の翻訳という国家的事業には当時の知的エリート（洋学者・国漢学者・文部官僚など）が多数かかわり、翻訳者や校正者として名を連ねている。本発表では、そのなかで翻訳者としての大槻文彦（1847-1928）と箕作麟祥（1846-1897）に注目し、彼らの翻訳行為が翻訳テクストにどのような痕跡を残し、そしてそれらが何を物語るのかを考えたい。AI 時代に忘れがちな根源的な翻訳の問題系「ためらい」と「とまどい」に２つの TS の視点から光を当てる。

退任者講演

17 号館 5 階 17511 教室　　14:20～15:50

青山学院での社会言語学/語用論研究 32 年：談話標識の拡大する文法化・歴史語用論・周辺部・意味変遷

講師：　小野寺　典子（本学文学部教授）
司会：　野邊　修一（本学文学部教授）

1996 年、英米文学科にコミュニケーション分野が創設されることとなり、社会言語学の公募によって入職致しました。本講演では、まず、コミュニケーションという概念が加わることになった言語研究・社会の背景、そして青学での 32 年間の研究内容から 4 点に絞り、報告致します。

社会言語学も語用論も、言語学という研究領域の下位分野です。語用論は意味の研究分野ですが、広義の定義では社会言語学とほぼ重複します。私は、語用論の中でも特に談話分析に関する研究を多くしてきました。談話分析とは、誰かがどこかで実際に生産した自然発話をデータとして、人のインタラクションを見ていく方法です。

特に、「談話標識の拡大する文法化」「歴史語用論」「周辺部」「意味変遷」に焦点を絞り、どのような研究者との交流・議論を通して進めてきたのかも振り返りたいと思います。例えば、2014 年–2016 年青山学院大学総合研究所プロジェクト『英日語の「周辺部」とその機能に関する総合的対照研究』などです。

退任者講演

17 号館 5 階 17511 教室　　16:00～17:30

『欽定訳聖書』－ その成立前史と受容 －

講師：　寺澤　盾（本学文学部教授）

司会：　葛西　宏信（本学文学部教授）

『欽定訳聖書』が成立する直前の16世紀は、イギリスではルネサンスや宗教改革の影響を受け聖書翻訳の気運が強まり、ウィリアム・ティンダルによる新約聖書の英訳を皮切りに、『カヴァデイル訳聖書』、『マシュー訳聖書』、『大聖書』、『ジュネーヴ聖書』、『主教訳聖書』など多くの英訳聖書が刊行された。一方で、ヘンリー8世の治世下の1546年、ティンダル訳とカヴァデイル訳の新約聖書の所有が禁止され、さらにカトリック信者であった女王メアリ1世による新教徒迫害と英訳聖書発禁など、宗教的抗争が相次いだ。こうした混乱・確執を治めるために、1604年1月16日にジェイムズ1世隣席のもと宗教会議が開催され、新たな英訳聖書（欽定訳）の編纂が決議された。その翻訳方針は、基本的には『主教訳聖書』に従うこと、それに変更を加える場合は他の先行訳に依拠することとなった。したがって、後世において「英語散文の金字塔」と称えられた『欽定訳聖書』は、実は、書き下ろしの新訳ではなく、先行の英訳聖書に依存するところが大きい。

本発表では、『欽定訳聖書』以前の英訳聖書を概観した上で、欽定訳の刊行までのプロセス、印刷と流布状況、受容についてお話しできればと思う。

研究発表

【発表 1】英文学 1　　17 号館 5 階 17506 教室　　10:00～10:40

アドバイザー：　田中　裕介　教授
　　麻生　えりか　教授
司会：　岡田　芳紀（博士前期課程 1 年）

人間社会に暮らす 1 頭の子グマと倫理観
―Michael Bond, *A Bear Called Paddington* (1958)
をめぐって

山田　結心（博士前期課程 1 年）

Michael Bond（1926–2017）の *A Bear Called Paddington*（1958）に始まるパディントン・シリーズ全 15 巻は、児童文学と動物ファンタジーの両方の要素を持つ作品群である。主人公である子グマのパディントンは、作中、南米ペルーからロンドンに到着し、人間社会の中で生活する唯一の動物として登場する。本発表では、この作品世界において、パディントンと暮らすブラウン一家をはじめとする人間の登場人物たちは、どのような価値観にもとづいて彼を受け入れ、また、パディントン自身は、どのような行動や態度によって人間社会（イギリス社会）に関わっていくのかに注目し、これらの相互作用を通して作品がいかなる倫理的価値や人間観・動物観を提示しているのか考えたい。そのために、児童文学および動物ファンタジーにおける善悪の表象や人間と動物との関係の提示について概観、整理し、本シリーズでの倫理観について考える土台とする。そのうえで、主にシリーズ第 1 巻の主要なエピソードでのパディントンとブラウン一家の関係を取り上げ、パディントンが共同体の一員として受け入れられていく過程を明らかにするとともに、本シリーズの特徴について考察したい。

研究発表

【発表 2】英文学 1　　17 号館 5 階 17506 教室　　10:45～11:25

アドバイザー：　田中　裕介　教授

麻生　えりか　教授

司会：　岡田　芳紀（博士前期課程 1 年）

Agatha Christie, *4. 50 from Paddington* (1957) における女性表象

塚田　真結（博士前期課程 1 年）

Agatha Christie(1890–1976)は英国推理小説を代表する作家であり、なかでもベルギー人探偵 Hercule Poirot や、老夫人 Miss Marple が探偵役を務めるシリーズで知られる。推理小説というジャンルは、社会や人間心理の写実的な描写という点でリアリズム小説と共通している一方、作品内では謎解きという独自の論理構造を持つ。こうしたジャンル的特徴は、女性の表象にどのような影響を与えているのだろうか。本発表では、Christie 作品を例にこの問題について検討したい。Christie の推理小説における女性表象はしばしば保守的と指摘され、実際にそういった要素は見られるものの、多様な職種や生き方を選択する女性も多く登場する。ここでは Miss Marple ものの一つ、*4. 50 from Paddington*(1957)を主に取り上げ、Miss Marple の目として屋敷に潜入する有能な家政婦 Lucy Eyelesbarrow を中心に、推理小説における女性表象について考察したい。

研究発表

【発表 3】英文学 1　　17 号館 5 階 17506 教室　　11:30～12:10

アドバイザー：　田中　裕介　教授

久野　陽一　教授

司会：　岡田　芳紀（博士前期課程 1 年）

Satan の Vicious *Prohairesis* は如何に形成されるか？

John Milton の *Paradise Lost* における

Aristotle の *Nicomachean Ethics*

龍野　隆治郎（博士後期課程 1 年）

本発表は John Milton （1608-1674）の *Paradise Lost*（1667）における Satan の自由意志の濫用を、Aristotle（384-322 BCE）の *Nicomachean Ethics*（350-330 BCE）における *prohairesis*（熟慮的選択）の観点から検討する。Joshua Scodel は 9 巻の Adam と Eve、並びに Satan の悪しき熟慮と選択の過程を指摘した。本発表はこれを踏まえ Satan の意志形成を *vicious prohairesis* として分析する。1・2 巻では Satan は再度神への叛逆を図り、4 巻では改悛の可能性を放棄して悪を再選択する。一方 5 巻の Abdiel は独り Satan の演説に抗し、*virtuous prohairesis* を体現した。この対照を経るも、9 巻で Satan は熟考の末、人間を堕落させる最適解として蛇を選ぶ。以上から Satan の悪とは理性が悪しき目的に奉仕する実践理性の倒錯として捉えられる。

研究発表

【発表 1】英文学２　　17 号館５階 17507 教室　10:00～10:40

アドバイザー：　橋本　智弘　准教授
　　松井　優子　教授
司会：　佐藤　優羽（博士前期課程２年）

『ダロウェイ夫人』に表れる東洋的特徴

保　友花（４年）

「ダロウェイ夫人」に登場するエリザベスは、黒髪や“Chinese eyes”など、ダロウェイ家の他の人物とは異なる容姿を持つ。彼女には母親とは異なる価値観や、将来職業を持つ可能性が示唆されており、当時の女性に求められた規範とは異なる生き方の可能性が描かれている。こうしたエリザベスの人物造形において、“Chinese” や “Oriental” といった形容がどのような意味を持つのかを考察する。同じく“Chinese”という表現は「灯台へ」のリリーにも用いられ、彼女もまた新たな価値観を持つ女性として描かれる。本発表では、“Chinese”や“Oriental”といった形容と人物造形との関係に注目し、ウルフが女性としての新たな生き方の可能性をどのように示唆しているのかを考察する。

【発表 2】英文学２　　17 号館 5 階 17507 教室　　10:45～11:25

アドバイザー：　笹川　渉　教授
　　伊達　直之　教授
司会：　佐藤　優羽（博士前期課程２年）

Thomas Hardy の“The Darkling Thrush”における世紀末の超克

岩政　来愛（博士前期課程１年）

“The Darkling Thrush”は、トマス・ハーディ（Thomas Hardy 1840–1928）によって、19 世紀と 20 世紀という、世界が移り変わるタイミングに書かれ、“By the Century's Death-bed”というタイトルで、雑誌 *The Graphic* に 1900 年 12 月 29 日に掲載された。Hardy を代表する詩の一つで、彼が詩人へと戻った晩年に書かれたものであり、自らの過去を振り返る、過去を主題とした作品である。前半では詩人が森の風景を眺望し、世紀末の暗い人間世界の「死」というイメージが現れ、後半では、突如暗闇に響く老鳥のツグミの強い囀りに、一閃の希望の示唆も読み解くことができる。語り手は、世紀末の暗闇の中で囀るツグミに、新世紀への明るい希望を見出そうとしたのである。悲観か、希望か、シニニズムか、研究者にも解釈が分かれる。本研究の目的は、ツグミなどの表象を通して、世紀末が抱える新しい時代への不安を、語り手が視覚的に見る自然と聴覚から感じた自然との関係性の中でどのように捉え、乗り越えようとしたのか、その認識がのちの作品へどのように繋がっていたのかを検証することである。

研究発表

【発表 3】英文学２　　17 号館５階 17507 教室　　11:30～12:10

アドバイザー：　橋本　智弘　准教授
　　松井　優子　教授
司会：　佐藤　優羽（博士前期課程２年）

Elizabeth Gaskell の *Mary Barton* におけるケア労働と生存

橋本　真里菜（博士前期課程２年）

Elizabeth Gaskell（1810-65）の *Mary Barton*（1848）は、産業都市マンチェスターを舞台に、労働者階級の貧困や生活を描いた作品である。これまでの研究では、本作を産業小説として位置づけ、労働者と雇用者の対立や階級問題を中心とした分析が多く行われてきた。本発表では、Mary Barton と Jane Wilson を中心に、労働者階級における賃金労働とケア労働の関係に着目する。特に、幼少期から工場で働いていた Jane が、結婚当初、料理や洗濯などの家事をほとんど知らなかったと回想する場面を取り上げる。この語りは、女性が家庭内のケアを担うことを理想とする中産階級的な女性像と、賃金労働にも従事する労働者階級女性の生活とのずれを示している。さらに、Mary が賃金労働と家庭内の役割をともに担う姿や、男性が育児や困窮する人々への生活援助に参加する場面を分析する。これらの描写を通して、本作ではケアの担い手が女性だけに限定されず、労働者階級の人々が相互に生活を支え、生存を維持するための実践として描かれていることを明らかにする。

研究発表

【発表 1】米文学　　17 号館 5 階 17508 教室　　10:00～10:40

アドバイザー：　Mary Knighton　教授
　　来馬　哲平　准教授
司会：　　松坂　朱莉（博士後期課程３年）

Eugene O'Neill の *Beyond the Horizon* における クィアな関係性

深井　捺稀（博士前期課程１年）

Beyond the Horizon（1918）はアメリカ演劇の父と称された Eugene O'Neill（1888–1953）の初期の長編演劇であり、彼にブロードウェイでの成功と、初めてのピュリッツァー賞をもたらした。この作品では兄 Andrew Mayo、弟 Robert Mayo による隣人夫妻の娘 Ruth Atkins をめぐる三角関係が描かれるとともに、兄弟のそれぞれの事業の失敗、結婚生活の破綻、Robert の死などを通して、誤った選択をした人々の破滅や、夢と現実の乖離が描かれている。

一見すると、本作は Robert、Andrew、Ruth による異性愛的な恋愛の三角関係をめぐる物語として読むことができる。しかし近年の研究において O'Neill の代表作の 1 つである *Mourning Becomes Electra*（1931）における三角関係のクィアな分析をした研究があることを鑑み、本発表では *Beyond the Horizon* における三角関係のうちに存在する Robert と Andrew のホモソーシャリティを読み取り、兄弟間の争いやつながりを超えた、2 人のクィアな関係性をテクストの詳細な分析や Eve Sedgwick の理論を参照して検討する。

研究発表

【発表 2】米文学　　17 号館 5 階 17508 教室　　10:45～11:25

アドバイザー：　橋本　智弘　准教授
　　来馬　哲平　准教授
司会：　松坂　朱莉（博士後期課程３年）

Richard Powers の *The Overstory* における物質としての時間
―身体性とメタモルフォーゼによる人間中心主義の解体

太漏　明音（４年）

アメリカの作家 Richard Powers の *The Overstory* は、人間と樹木の濃密な関わり合いを通じて、環境破壊の実相とそれに対峙する人々の多様な姿を描いたピューリッツァー賞受賞作である。本発表では、作中において近代の直線的な時間が解体され、樹木的な時間や身体性が再構築されるプロセスを分析することで、本小説がいかに人間中心主義を揺さぶっているのかを明らかにする。まず、現象学や物語論を基盤に、年輪や木目に見出せる物質としての時間と、物語の速度変化（加速・減速）を検証し、樹木が動的な行為主体として描かれていることを示す。次に、身体移動の制限が登場人物の知覚を拡張し、時間感覚の変容を駆動するプロセスを論じる。最後に、作中で頻繁に言及されるオウィディウス『変身物語』と Powers の描くメタモルフォーゼを比較しつつ、肉体的なメタモルフォーゼや Forest Name を通じた言語的重なり合いが、人間と樹木の境界を融解させ、精神的変容をもたらすことを示す。以上により、本作が物質としての時間と身体性の再構築を介して、近代の人間中心主義的思考の再考を迫る批評的テクストであることを明らかにする。

【発表 3】米文学　　17 号館 5 階 17508 教室　11:30～12:10

アドバイザー：　外岡　尚美　教授
　　来馬　哲平　准教授
司会：　松坂　朱莉（博士後期課程３年）

A Composite character in *The Grapes of Wrath*

赤羽　明　カルス（博士前期課程１年）

John Steinbeck's *The Grapes of Wrath* (1939) follows the Joad family's journey westward to California as Dust Bowl migrants during the Great Depression. By dividing the traditional hero-type protagonist into a composite character split between Tom Joad and Jim Casy, Steinbeck allows readers to identify the limitations of both isolated figures: Casy's abstract ideology lacks practicality, while Tom's focus on immediate realities lacks the broader philosophical vision. While scholars such as Peter Lisca and Louis Owens point out that Casy acts as a catalyst or a mentor for Tom's spiritual and ideological transformation from individualism to collective humanity, this paper argues that the influence goes both ways. Casy's selfless sacrifices at a Hooverville and Hooper Ranch serve as the pivotal turning point that reshapes Tom, while Tom's unfiltered practical perspective provides Casy with a foundation he needs to reshape his worldview. Steinbeck does not end with a neat solution or victory for the migrants, but rather demonstrates that even a unified migrant community with endurance cannot achieve justice without broader societal recognition and support.

【発表 1】コミュニケーション　　17 号館 5 階 17509 教室　　10：00～10：40

アドバイザー：　長沼　君主　教授
　　飯田　敦史　教授
司会：　小泉　明日香（博士前期課程１年）

Why Japanese English Education Needs Reform: A TESOL and Intercultural Communication Perspective

青山　千夏（４年）

Personal experiences with English education and communication in both the United States and Japan provided the starting point for this study. Growing up in the United States and later experiencing English education in various regions of Japan led to an awareness of differences in how English is taught, learned, and perceived. Experiences of studying abroad and job hunting also prompted consideration of how much English proficiency is actually required in academic and professional settings and what learners should ultimately aim to achieve through English education.

From the perspectives of Teaching English to Speakers of Other Languages (TESOL) and intercultural communication, this study examines whether the goals of Japanese English education reflect the realities of English usage. This study emphasizes on grammatical accuracy, vocabulary acquisition, and examination-oriented learning, as well as the importance of communicative and intercultural competence. It also argues that English education should move beyond the acquisition of linguistic knowledge and provide learners with opportunities to use English meaningfully, develop learner autonomy, and communicate effectively across linguistic and cultural boundaries. Ultimately, this presentation considers how the aims of English education in Japan can be reconsidered in light of the skills and competencies required in today's globalized society.

【発表 2】英語教育学　　17 号館 5 階 17509 教室　　10:45～11:25

アドバイザー：　長沼　君主　教授
　　飯田　敦史　教授
司会：　小泉　明日香（博士前期課程１年）

Rethinking Education in the Age of AI: Human Skills, Experiential Learning, and Career Development

平林　紗良（４年）

This study explores how education should change in response to the rapid development of AI. As AI makes it increasingly easy to access, generate, and process information, education may need to shift from simply acquiring knowledge to applying knowledge, solving real-world problems, and creating value with others. It focuses on human skills such as communication, critical thinking, creativity, problem-solving, collaboration, and ethical judgment. The research examines whether current Japanese education sufficiently develops these skills through classroom observation and questionnaire surveys of students from junior high school to university, as well as teachers. In addition, the study examines practical educational approaches, including project-based learning and collaboration among universities, companies, and local communities. By connecting education with real-world experiences and career development, such approaches may provide students with opportunities to develop transferable skills and explore future career possibilities. The study argues that AI should not replace learning, but rather serve as a tool that enables students to engage with more complex questions and real-world challenges. Ultimately, this study considers how education can move from knowledge-centered learning toward experiential, collaborative, and society-connected learning in the age of AI.

2026年12月12日・19日開催

学生対象企画

青山パフォーマンス・フェスティバル

学部生による英語発表会

全国大会	12月12日(土)	13:00～17:00
	9号館4階	940教室
学内発表会	12月19日(土)	13:00～17:00
	17号館6階	17610教室

他大学、および本学学部生が文学作品の群読(readers theatre)、およびオリジナル英語劇を発表します。指導なさっている先生方による講評もあります。スピーチ・コンテストの様な順位付けはしません。サークル活動など、学生の自主的な活動とも異なります。ここでの発表は教員の指導を受けたものに限定されます。よって、その理論背景を学ぶ好機になります。教員による指導目標や作品の解説を聞きながら、英語による朗読発表やプレゼンテーションを批評する視点を養います。

大学生による多くの英語発表を見学し、アドバイザーや発表者と意見交換することで問題意識を高め、更なる英語力の向上を目指しましょう。司会進行と発表は全て英語で行ないます。

どなたでも自由に参観できますので、積極的に参加して下さい。

アドバイザー： Chris Parham氏（本学文学部　非常勤講師）
Andrew Reimann氏（本学文学部　教授）
Collin J. Thompson氏（本学文学部　准教授）

司会： 大川　道代 氏（本学文学部　准教授）